

平成28年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート (第2回検討会: H29.3.2)

評価基準 (達成度)

- A 100%以上達成
- B 80~99%達成
- C 60~79%達成
- D 40~59%達成
- E 39%以下の達成

重点目標	学生・研修生の円滑な就農の支援 1個別経営計画作成のための個別指導強化 2農業法人等の求人情報収集と関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化
------	--

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
1	新規就農者の育成	1 近年、非農家出身学生が約6割を占めている中、農業法人等からの求人が増えており、雇用就農による就農者が増えている。H27年度の場合、卒業生の44%が雇用就農し、就農率(自営就農、研修後就農及び雇用就農)は61%であった。 2 雇用就農が増えている一方、中には短期間に離職したとの情報もあり、就業定着の支援が必要である。 3 Uターンをキッカケに就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を確保することも必要である。	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進 2 雇用就農の定着支援 3 Uターン就農者の掘り起こし	1 就農支援関係機関との情報(求人、求職、研修)共有を進めるとともに、就農意識と農業の実践感覚醸成のための1年次の農家実習派遣を勧める。 ・農業改良普及所等への雇用就農志望学生の情報提供 ・農業法人等を招いての雇用就農相談会の開催 ・1年次の農家実習派遣の実施(評価指標) ・普及所との情報共有DBの設置と活用 ・雇用就農相談会の求人者参加数60件(2回合計) ・1年次農家実習派遣の実施率50% 2 雇用就農先訪問による就農定着支援を実施する。 ・昨年度卒業した雇用就農者への面談支援(評価指標) ・離職者0人(H27年度卒) 3 大阪等での就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介、就農希望者の掘り起こしを行う。(評価指標) ・研修生の掘り起こしと受入れ	1 各科職員が就農志望者(含、雇用就農)について各普及所等に情報をつなぎながら進路指導を進めており、情報共有DBを設置し活用を始めた。 ・雇用就農相談会を7月(求人者29、求職者48)と11月(求人者35、求職者50)に開催し、学生8名、研修生2名が雇用就農決定。 ・1年次農家派遣研修10名/20名(他に雪害による保留1件) 2 雇用就農した卒業生について心配な情報を入手したため、本人訪問して相談(1件)。その他の本人訪問(2件)。離職者1名/雇用就農者8名 3 県外相談会に参加した(相談者:大阪37名/4回、東京11名/3回)。2名がアグリチャレンジ経由で自営就農に向けた研修に進んだ。	B	・普及所等との就農関連情報の共有手段として職員がDBを気軽かつ有効に利用する意識の醸成が必要。 ・雇用就農相談会に参加の求人者数に対してマッチングの場としては求職者数が少なく、雇用就農の機会を広く提供する視点で一般の雇用就農志向者へも募集拡大する。 ・1年次の農家派遣研修は実際の現場を早めに体感する機会として学生からも好評だが、学習意識の早期醸成のため早期実施を検討する必要がある。 ・自営就農も含めた卒業生の情報を職員間、さらには普及所等と共有して就農定着に向けたフォローが必要。 ・県外相談会でのUターン就農者の掘り起こしは情報発信の機会としても継続実施することが大切。 ・将来的な自営就農も含め、自営就農志向の学生に特化した指導として就農に向けた個別の道筋(経営設計などの就農ビジョン)を明確化させ、自営就農への意識向上を図る。	(1回目) ・就農支援を目的にした研修に関わっているが、そこでの就農定着は半分程度、特に縁がない(家、土地等がない)者にとってはハードルが高い。技術の前に、とにかく意欲・やる気が問題、難しいことだが、そこを重点的に取り組んで欲しい。 ・非農家出身者が多いことを踏まえると、農業の大切さ、素晴らしさを理解させることが仕事(農業)を続けていけることにつながる。 ・精神面、社会に出て勤めるという意識が重要。地域との関わり具合によっても続けられるかどうかが決まってくる。地域全体で応援しながら農業の大切さを分かってもらえればいい。 (2回目) ・積極的な人材を求めている。個人の性格ではあるが、積極性を育てる教育を行って欲しい。 ・雇用就農相談会、今年度参加した。将来的に自営就農を志望する人も含めて受け入れたい。 ・複式簿記の学習はどうなっているか。自営就農は必ず勉強しておくべき。雇用就農でも経営管理を通じてよりよいパートナーになれる。講義で習得しようと思うと十数回では難しい。理解できる学生は相当優秀。
2	学生の確保	1 入学生数は平成23年度以降、定員割れが続いている。(H24-28年度の入学者数:26、25、23、23、21名)	1 農業高校との連携による学生確保	1 オープンキャンパス(4回)、農高生対象の就農イメージ相談会の開催及び農高との部門別指導職員交流の実施により就農に向けた農大進学を動機付ける。(評価指標) 学生入学者数 定員30名確保	・指導職員又は校長、課長が農業高校を訪問し担当教員と情報交換した。(智頭:園芸、湖陵:野菜・花き、倉農:果樹・野菜・畜産、日野:アグリライフ) ・倉農の若手教員(野菜担当)が来校し、技術相談等交流。 ・就農イメージ相談会4名受入れ(倉農3、日野1)、倉農食Pro.講座4名受入れ(湖陵) ・農高に卒論発表会及びプロジェクト計画発表会を案内し、倉古農高教員の出席を得た。 入学見込23名(3/1現在)	B	・H29年度、高大連携の一環として、農高生の職業観を醸成し農業分野への進路につなげるため、食Pro.講座への受入れ、長期インターンシップ先の選定支援などの協力を行う。 ・1年間の内地留学研修として農高教員を受入れ、人的交流を通してより現場感のある農業教育につなげると同時に農大指導職員の教育力向上に資する。	

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
3	学生の営農技術向上	<p>【養成課程共通】</p> <p>1 学生の就農意欲や体力、学力は千差万別で、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。</p> <p>2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。</p> <p>3 多様化する農業形態のなかで営農するためには、コースを枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚をもった農業者を育成する必要がある。</p> <p>4 非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。</p>	<p>1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実</p> <p>2 計算能力を含めた基礎学力の向上</p> <p>3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上</p> <p>4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める</p>	<p>1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、学生と職員の共通認識を図り、学生の苦手分野を克服、作業時間を含むコスト意識の醸成するための指標として活用する。（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度アンケートの実施（7月、1月 2回）とそれを基にした個別指導（随時） <p>2 1年生を対象とし基礎学力（計算、単位など）の把握と学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習の中で、実践的に肥料・農薬計算を実施する。（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none"> 学力補完補講（20回） 学力テスト（随時） 専攻実習時の実戦力評価（随時） <p>3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また校外で「農大市」を実施し、商品PR方法を学び、対面販売を行うことで消費者ニーズを把握する。また（評価指標）</p> <ul style="list-style-type: none"> 校内技術競技実施（2回） 農大市実施（校内3回、校外4回） 修農祭での販売（1回） <p>4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース 2回以上）</p>	<p>1 前期の理解度アンケートは全コース実施。アンケートを基に個別指導を行っている（随時）</p> <p>2 1年生を対象とし基礎学力（計算、単位など）の把握と学力補完のための補講を行った。学力補完補講（15回）、学力テスト（7回）を実施。苦手な項目は回数を重ねるなど理解が深まるように指導を行った。専攻実習の中で、肥料・農薬等の散布時に計算させるなど、事あるごとに計算させている。</p> <p>3 校内技術競技は1回実施、2回目は地震の影響で中止した。6月から月1回程度対面販売を実施（農大市、出張農大市等）。また、夏休み中ではあるが、昨年引き好評であったお盆前の臨時農大市を開催。お盆前の賑やかな状況が学生にもわかり、また、夕方ということで日頃農大市に來られない消費者の方にも好評であった。2年生全員で大阪市場流通研修として、鳥取の農産物を専門に扱っているいしはら商店（神戸市灘区）を訪問。その後、各コースに分かれて、各関係卸売市を見学し、様々なアドバイスを頂いた。今年度新たに、6次産業化プロデューサーの研修を農大で実施、1・2年生で計9名が研修を受けた。</p> <p>4 農家・卒業生等の訪問、視察を2回以上実施。</p>	B	<p>・昨年からはじめた基礎学力補完講座は、学生にも好評で、個々の学力アップも認められた。専攻等の授業の中で反復しながら、知識を定着していくことが重要。</p> <p>・対面販売での農大市等では、大阪市場流通研修で学んだポップ、販売方法などの工夫も見られ、また、アドバイスを参考に農産物加工に取り組むなど学生個々に工夫が見られた。</p>	<p>(1回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 農業を学ぶ上で、売るという行為が一番大変。農大市等の販売も良いが、もっと積極的に自分の作ったものを売り込む、または、売り方を研究するカリキュラムがあっても良いのでは。 <p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 販売方法や販売時間など、前回の会（第1回委員会）で提案した部分が指導に活かさせていてうれしい。 基礎学力の向上については、学生レベルもまちまちだが、雇用就農が多い中で失敗は許されないのも、もっともっとしっかり指導して欲しい。 積極性を育てる教育をして欲しい。 販売の工夫で、大阪市場流通研修の経験が活かされているように感じた。また、ポップなど自分の思いをどう表現するか、勉強になっていると思う。
		<p>【果樹】</p> <p>2年間の限られた期間で、永年作物である果樹の栽培技術を完全に習得する事は困難であるが、可能な限りの技術習得を図るために、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。新品種、新技術を積極的に導入し、生産現場の現状やニーズに応じた知識・技術の習得が必要である。</p>	<p>1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成</p> <p>2 新品種、新技術の導入と栽培技術の習得</p>	<p>1 「2年時」</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学生の担当樹種を決定し、管理作業を行う際にはその目的や方法を該当学生が他学生に説明する。 プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。（評価指標） 作業前説明の評価：理解度チェックの活用（2年全員） プロジェクト中間検討会の実施（2年全員、3～4回/年） <p>「1年時」</p> <ul style="list-style-type: none"> 「20世紀」の担当樹を割当て、年間管理を責任を持って完結させる。（評価指標） ナシを中心に基礎知識の理解度確認のための小テスト実施。 <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> 計画的にナシのプロジェクト仕立てを導入し、技術習得を図る。 新品種等に関する研修会、ソサライ等に積極的に参加し、学習意欲の喚起を図る。（評価指標） 研修会等への参加 4回/年 	<p>1</p> <ul style="list-style-type: none"> 2年生全員が各担当樹種に係る作業説明を行った。理解度チェックにより自己評価させたうえで、職員の評価シートに記載し本人へ渡した。特に説明が不十分であった等、改善を要する学生に対しては口頭でも指導したが、十分な指導時間が確保できなかった事が反省点である。 プロジェクト中間検討会を実施した（7,11,12月 計3回）。各学生の進捗状況等を把握すると共に、まとめ方等について指導した。本コースから1名学校代表に選出され、中四国プロジェクト発表会に出場した。 1年生に対する基礎知識確認の小テストは未実施。 <p>2</p> <ul style="list-style-type: none"> ナシ新品種研修会等へ出席 6回 生産現場を体験させるため、1年全員（3名）を近隣の梨農家で研修させた（3日間/人）。学生からは「農家の様子が分かって良かった」と好評であった。 	B	<p>1 「理解度チェック」のより効果的な活用方法を検討し実践する。</p> <p>プロジェクト学習については、中間検討の随時実施を継続して行う。</p> <p>特に1年生に対しては、ナシを中心とした果樹の基礎知識習得のための方法を再検討する。</p> <p>2 新品種、新技術等の理解促進のため、継続して研修会等に参加する。また、実際の農家等への視察見学の機会を更に増やし、生産現場の実情を把握させる。</p>	<p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学生が自分自身で剪定等できる木が主枝単位という事があったが、1樹まるまる担当するというようなことは無理な状況か。 小テストについて出来ていないという事だが、これからの残りの期間でもどうか。 ジョイント仕立てに取り組んでいるが、現在はどんな様子か。 1年生が農家に研修に行っているが、作業内容の関係もあり、研修時期はいつ頃か。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【野菜】</p> <p>コースの学生16名のうち、農業高校以外の出身者が7名(44%)、非農家の学生が9名(56%)を占めており、農業に関する基礎知識及び技術の習得支援を進めている。</p> <p>将来的な独立就農の意向を現段階で6名(38%)の学生が示しており、実習のレベルを個別的就農目的に合わせて充実させることが重要である。</p> <p>環境負荷を軽減する農業への関心を示す学生もおり、これらのニーズに対応した実習を行う必要がある。</p>	<p>1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成</p> <p>2 農業基礎知識の習得支援</p> <p>3 環境保全型農業の実践</p>	<p>1 1年生は露地およびハウスの圃場で、野菜の栽培実習を共同で行い、農業基礎技術の習得を図る。2年生はプロジェクト研究において、各自の興味や進路事情に合わせた課題設定を行い、主としてハウス1棟を1人で管理し、課題解決の実践力を養成する。</p> <p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 理解度・習熟レベルアンケートの総合評点：50点以上（1年生）、70点以上（2年生） プロジェクト学習の達成度：総合評価点80点以上 <p>2 日本農業技術検定の認証取得をめざした技術解説や専攻ゼミナール等の基礎教育を実施する。</p> <p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> 1年次修了までに3級、卒業までに2級の取得 <p>3 有機栽培実習と、鳥取県特別農産物の認証を受けた栽培を実施する。</p> <p>【評価指標】</p> <ul style="list-style-type: none"> トレーサビリティ（栽培管理履歴）記帳：全品目実施 特裁認証栽培の実施件数（3件） 化学農薬を使わない太陽熱土壌消毒：ハウス2棟で実施（うち1棟は還元土壌消毒法を併用） 	<p>1 理解度アンケートを実施し、習熟レベルを把握し、職員が把握する習熟レベルと本人が判断した習熟レベルとの乖離を本人に意識させ、指導資料とした。</p> <p>(1年生)</p> <p>露地およびハウス品目それぞれ担当を持ち、責任を持って管理するとともに、共同で管理することにより、野菜全般の基礎技術の習得を図った。</p> <p>理解度・習熟レベル50点以上者率75% (2年生)</p> <p>プロジェクト研究に取り組み、課題解決手法を習得するとともに、1年生への指導を通して、理解度の向上を図った。</p> <p>理解度・習熟レベル70点以上者率38% (2年生)</p> <p>プロジェクト学習</p> <p>総合評点80点以上者率50%(4/8)</p> <p>2 農業技術検定資格取得 (1年生)</p> <p>3級取得者率87.5%(7/8)</p> <p>2級取得者率25%(2/8) (2年生)</p> <p>2級取得者率25%(2/8) (3級取得100%)</p> <p>3 有機栽培</p> <p>有機圃場で15品目を栽培。</p> <p>ナス、スイカ、メロン、トマトなど4品目で特別栽培認証を取得した。</p> <p>ハウス3棟で還元土壌消毒を実施した。</p>	C	<p>・本県の主要品目であるスイカ、ネギ、フロッコリー等を主に作型を組み合わせ、同一品目を複数回栽培し、知識・技術の習熟を図る。</p> <p>・栽培管理を通し、観察力の習得に重点を置く。</p> <p>・学生の習得レベルに合わせた指導を行うとともに、1年生を指導できる2年生を育てる。</p> <p>・有機栽培のメリットデメリットについて理解を高めるとともに基本技術を理解する。</p>	<p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 2年生が1年生をきちんと指導できることは大事なこと。 有機栽培については、1JUターン者が有機に拘りを持つケースが多い。学生にはメリット、デメリットの説明をし、良いことだけではないことをきちんと理解させて欲しい。 作型を組み合わせると同一品目を複数回栽培することについて、シロネギはそのことが可能な品目、夏から秋冬作型を組み合わせた栽培ができる。 観察力をつけることは大事なこと。扇子による差はあるが訓練で向上することは可能。動議付けをしながら観察力の向上を図って欲しい。
		<p>【花き】</p> <p>基礎技術の習得を中心に進めているが、実用化された新技術や本県に適する新品目の導入を行い、栽培技術の向上を図る必要がある。</p> <p>また、花は嗜好品であることから、必ずしも生活に必要なものではないが、身近に花がある生活をするには、様々な人に花の良さを理解してもらう必要がある。</p>	<p>1 栽培基礎技術の向上と花が売れる時期を目標とした栽培の徹底</p> <p>2 花き品評会への参加、県内先進農家への視察</p> <p>3 花育活動の取り組み</p>	<p>1 学生の担当品目を決めて栽培管理を行い、基礎技術を習得させる。特に2年生は能力に応じてプロジェクト課題設定を行い、しっかりしたまとめが出来るように進行管理を行う。また、花き部門で営農を目指す場合、花の消費が多い時期（お盆、彼岸、年末）に出荷することも重要であることから、出荷時期を意識しながら栽培管理を行う。</p> <p>(評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 作業の確認と作業日誌の記載の徹底 プロジェクト活動の進行管理 <p>2 10月に開催されるイベント「花のまつり」の中で、鳥取県花き品評会が開催されるが、学生が栽培したものを出品する。また、県内生産者の高い技術に接することで、意識向上を図る。</p> <p>(評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 花き品評会への出品参加 1学生あたり1点以上 県内先進地視察 2回 <p>3 「花育」活動を行うことによって、自身の花に対する理解を深め、また、他の人に花を良さを理解してもらうにはどのようにすれば良いか体験をする。</p> <p>(評価指標)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「花育」活動 1回 	<p>1 作業の確認は専攻のある毎日行っており、作業日誌についても確認しながら、コメント等を記載。また、2年生のプロジェクトについては日々進行管理を行っている。</p> <p>2 花き品評会は1学生あたり1点以上の出品。シンテッポウユリで審査員特別賞を受賞。</p> <p>県内先進地視察は2回実施予定（6月：日南町、9月：大山町）。また、県等が主催の品目部会にも積極的に参加した（ユリ部会：2回、花壇苗部会各1回）。</p> <p>また、今年初めて1年生をとっとり花回廊で職場体験研修を行った（2日間）。</p> <p>3 「花育」活動については平成29年2月10日に近隣の関金保育園で実施。学生が自ら栽培した花を使い、園児に植え方等を教えることで、普段あまり感じない疑問や教え方が学べた。</p>	B	<p>1 プロジェクト活動は、積極的に取り組むよう日頃から声かけを行う。また、1年次からプロジェクト活動を意識させながら指導を行う。</p> <p>生産物の販売に対して常に意見交換をしながら、売れば良いではなく、単価やコストを意識させながら指導を行い意識向上を図る。</p> <p>2 品評会への出品、先進地視察等、学生が意欲向上につながるよう指導する。</p> <p>3 「花育」活動は継続して実施する。</p>	<p>(1回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 花育はとても良い経験。自分の作ったものを喜んでもらえるような経験を増やして欲しい。 <p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 花き品評会に参加するのは非常に良いことであり、また、その中でプロに混じって出品物が受賞するのは本人の励みになる。 とっとり花回廊で職場体験研修したようだが、もっともっと研修をやらせて欲しい。 花育は、教えることの大変さを学び、また、自分自身の勉強が必要という経験になっているようなので、続けて欲しい。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【作物】</p> <p>1 トラクター、田植機、コンバイン等の機械操作は未経験の学生がほとんどである。</p> <p>2 有機栽培に漠然とした興味を持って入学する学生が多いが、具体的な栽培管理は未経験である。</p> <p>3 法人就農を目指す学生も多く、水田農業の複合経営で取り入れられることが多い白ネギ（秋冬）やブロッコリー（秋冬）の栽培技術の習得も必要。</p>	<p>1 農業機械操作技術の習得</p> <p>2 有機栽培技術の習得</p> <p>3 白ネギ、ブロッコリーの栽培技術習得</p>	<p>1 農大の管理ほ場面積を維持しつつ、近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、水田での作業面積を確保する。また、トラクターでの耕耘技術競技を実施し、技能向上を図る。 （評価指標） (1)理解度アンケート（よくできる、できる、もう少し、できないの4指標）でのトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。 (2)耕耘技術競技の実施 50分/10a以内の学生50%以上 【参考】前年平均時間49分41秒</p> <p>2 有機栽培技術導入ほ場を前年並みに確保。 （評価指標） 理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。</p> <p>3 白ネギ（秋冬）、ブロッコリー（秋冬）を栽培 （評価指標）栽培面積の維持 理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。</p>	<p>1 近隣農家から機械作業実習ほ場の提供を受け、田植え、コンバイン収穫実習を一人当たり3ほ場程度実施した。耕耘技術競技は未実施。 （評価指標） (1)理解度アンケート「できる」以上の割合 トラクター 83%(2年75%、1年100%) 田植機 67%(2年75%、1年50%) コンバイン 50%(2年50%、1年50%) (2)耕耘技術競技 未実施</p> <p>2 3ほ場で有機栽培技術導入、有機的管理で栽培 （チェーン除草2ほ場、紙マルチ栽培1ほ場） （評価指標） 理解度アンケート「できる」以上の割合50%(2年75%、1年0%)</p> <p>3 白ネギ(秋冬)、ブロッコリー(秋冬)を栽培 （評価指標） 理解度アンケート「できる」以上の割合67%(2年50%、1年100%)</p>	B	<p>1 学生数に対して作業量が多くなったこと、アグリチャレンジ研修対応で専攻学生への対応時間が減少したことなどから、「座学での学習時間が少ない」との声が学生から聞かれるため、学生数に応じた作業量になるよう、各品目の栽培管理計画を見直し、実習と座学のバランスを改善する。</p> <p>2 座学での学習時間を増やし、理解度を高める必要があるため、管理ほ場を2ほ場に減少する。</p> <p>3 座学での学習時間を増やし、理解度を高める必要があるため、栽培面積を学生数を考慮し削減する。</p>	<p>(2回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 有機栽培のメリット、デメリットをしっかりと教えてほしい。 農業法人は複合経営化が進む。ネギなどの野菜実習をしっかりと進めてほしい。 理解度アンケートを次年度の指導に活かすため、指導職員の客観的な評価が必要。
		<p>【畜産】</p> <p>1 畜産コースにおいて、非農家出身学生が多数を占めているため、卒業後即自営畜産経営は難しい。そこで、生来的自立も見据えながら畜産関連業種、農業法人就農に力を入れている。</p> <p>2 畜産関連業種又は農業法人が本学学生に求める人材とは、家畜（牛）の基本的管理技術及び畜産の管理用機械（ホイールローダー等）、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材である。</p>	<p>1 家畜（牛）の繁殖、生理に関する基本的知識を踏まえた管理技術の習得</p> <p>2 家畜管理用機械の操作技術の習得、飼料用作物関係機械の操作技術の習得</p> <p>3 牛の繋養、誘導技術の習得</p>	<p>1 牛舎及び放牧場、運動場等における牛の発情行動及び便の状態などを継続観察させ、健康と異常とをチェックできる目を養い、健康に管理する方法を習得する。 （評価指標） 理解度アンケートにより、牛の発情行動、健康状態のチェックができる以上の評価。</p> <p>2 ①飼料給与・調製、②牛舎内の糞及び敷料の搬出・運搬、③糞乾燥機械の操作④搾乳作業等日々の継続した飼養管理の継続実施を図る。また、⑤飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫・調製作業）については体験実習を実施する。 （評価指標） 理解度アンケートでのコンプリートミキサー、ホイールローダー、搾乳機械（ミルクパーラー）の操作が日常的にできるまた、マニュアルスプレッダー、ロールラッピングマシン、コーンハーベスター等の操作が1人でできる以上の評価。</p> <p>3 乳牛および和牛の共進会に参加を目指して飼養管理技術の習熟(業界の求める人材育成)を図る。 （評価指標） 各共進会への出品頭数（中部地区2頭以上、県共1頭以上）</p>	<p>1 理解度アンケート調査結果から、「発情行動のチェックができる」1年生53%、2年生66.7% 「健康状態のチェックができる」1年生47%、2年生66.7%</p> <p>2 ①～④家畜管理機械の操作日常的にできる (1年生) (2年生) ローダー 60% 73.3% ミキサー 57% 73.3% ⑤飼料用作物関係機械の操作が1人でできる (1年生) (2年生) けん引操作 40% 66.7% ※個人の技術レベルに差が見られた。 1及び2共に1年生では達成度が低い。家畜の管理経験時間及び操作回数が少なかったことが原因と考える。</p> <p>3 中部地区2頭、県共1頭の出品を行った。中部地区では、1頭は、1等2席と管理及び誘導技術習得の成果が出た。</p>	B	<p>1 発情行動及び健康状態の観察力は毎日の専攻実習の中で着実に付いてきている。今後、専攻実習の中で知識習得の時間も加えながら継続してその向上を図る。</p> <p>2 家畜管理用機械及び飼料用作物関係機械についても操作時間を意識して増やすことが今後の操作技術力の向上につながる。計画的な操作実習カリキュラムを立案実施していく。</p> <p>3 共進会出品については評価指標である頭数の参加を目指して管理技術の向上を継続して図っていく。</p> <p>1, 2, 3共通 農高出身者等畜産経験を積んでいる学生に対する技術的指導については、専攻中に配慮しながら進めていく。具体的には、1年生時から2年生が受ける繁殖管理の実習（発情確認から人工授精の実施）、及び搾乳の衛生及び管理の実習を同時に受講させる。</p>	<p>(1回目)</p> <ul style="list-style-type: none"> 高校3年間で既に畜産を経験した学生にとって、農高以外の出身者と机を並べて同じように勉強するのは物足りないのではないか。そういう学生に対する指導はどうか（足りているのか）と考える。また、牛の飼養頭数と学生数のバランスが取れていないのではないかと考える。 (2回目) 新年度の学生（1年生8名、2年生6名）に対して今の家畜の頭数（和牛（成牛）10頭、乳牛（成牛）17頭）はちょうど良いのではないかと考える。 学生への動物を観ることの意識付けが重要と考える。家畜への愛情をもつことが一番、そういった姿勢が養えればと考える。 また、農家は忙しくて特にコントラのオベ等人材が欲しいところである、その人材を作って欲しい。

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
		<p>【農業機械】</p> <p>1 農業法人への就職や就農を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作を行う上で、大型特殊免許の取得が必要。</p> <p>2 農業法人等から農業機械の操作技術のレベルアップを求めている意見がある。</p>	<p>1 大型特殊免許の取得</p> <p>2 農業機械の操作技術の向上</p>	<p>1 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定し効率的な練習を行う。また、昨年より練習グループ数を1グループ増やし、練習の待ち時間の解消に努める。</p> <ul style="list-style-type: none"> グループ① 練習期間（5月16日～6月6日）試験日（6月7日） グループ② 練習期間（6月8日～6月30日）試験日（7月1日） <p>（評価指標）1年生の大型特殊免許の合格率（100%）</p> <p>2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生を指導対象学生とし、農業現場で使用頻度の高い、刈り払い機及びトラクターの取り扱いについて、重点的に実習を行う。 *指導対象学生は各コース担任と相談の上決定</p> <ul style="list-style-type: none"> 刈り払い機：重点指導期間（7月～11月）実習（草刈り）5回/人、確認試験（実技）、習熟度アンケート トラクター：重点指導期間（7月～11月）実習（ロータリー耕耘）5回/人、確認試験（実技）、習熟度アンケート <p>（評価指標）確認試験の合格点達成率 草刈り（80%）、耕耘（80%）</p>	<p>1、1年生を5グループに分け（4グループ→5グループへ）、5月から6月にかけて練習を実施し免許試験を受験。（1人あたりの練習回数増え、待ち時間も解消）</p> <p>*免許取得結果 *受験者17名全員が合格し免許を取得。 （評価指標）合格率100%</p> <p>2、11月から12月にかけて実習を実施。 【刈り払い機】（野菜1名、畜産1名） *実習を3回実施（11月） *エンジン始動、各部の点検、刃の交換、草刈り実習 *確認試験（降雪のため未実施） *習熟度アンケート（2名に実施） *点検、刃の交換についての理解が深まるなど操作にも少し自信が付いた様子。 【ロータリー耕耘】（果樹5名、野菜3名、畜産3名） *実習を4回実施（12～1月） *ハウスを想定した耕耘実習を実施。（降雨・降雪によりほ場での実習不可） *確認試験（1/27、2/2、2/3の3回に分けて10名に実施） *10名中6名が合格点達成 *習熟度アンケート（11名に実施） *実習実施により、概ね、操作・運転についての理解を深めることができた反面、実習回数・期間について指摘あり。 （評価指標）草刈り（-）耕耘（60%）</p>	B	<p>・全員が合格し免許取得はできているが、実習中に作業機を破損させる事例もあるため今一度、安全運転を啓発するような取り組みの工夫も別途必要。</p> <p>・機械操作に不慣れな学生を対象に耕耘実習を設定したが、実施時期が天候不順な時期にあたり、露地ほ場での実習が思うようにできなかった。また、習熟度アンケートでも、耕耘実習の期間設定に関する意見（実習間の間隔が長い、回数が少ない）があったため、次年度は、各科の専攻実習に機械担当職員も参加し、実現場面での操作指導に取り組みたい。</p>	<p>（2回目）</p> <p>・農大で行っている大型特殊免許の研修に、知り合いが応募したが、定員オーバーで受講できません。なるべく多くの方が受講できるよう検討を。</p>
4	社会情勢に即応した実践教育の実施	<p>1 農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動（卒論）を実施している。</p> <p>平成27年度プロジェクト成果のうちプリンスメロンの栽培に関する成果1件を中央農協メロン部会で発表するとともに、成果2件を農業改良普及所野菜・花き特技研修会で発表した。</p> <p>2 卒業後の就農（自営、雇用等）に即応するため、大型特殊・牽引免許（農耕車限定）の取得支援の他、就職等のあらゆる場面を想定し、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。</p> <p>平成27年度は学生42名中20名が大型特殊・牽引免許以外の資格・免許を取得し、日本農業技術検定2級、3級についてそれぞれ8名、16名が合格した。</p> <p>3 1、2年生ともに履修内容に地域貢献活動（ボランティア）盛りこみ、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている。</p> <p>平成27年度は42名のうち39名が2回以上、ボランティアに参加した。</p>	<p>1 実用性の高いプロジェクト成果の確保</p> <p>2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保する</p> <p>3 地域社会活動への参加</p>	<p>1 課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できる成果を確保する。 （評価指標） *各特技普及員研修会、果樹研究同志会、農協生産部等 など校外での発表</p> <p>2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保する。 （評価指標） *大型特殊・牽引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得者割合50% *日本農業技術検定合格者割合60%</p> <p>3 地域貢献活動の情報収集と提示および学生の意識啓発 （評価指標） *実施率100%（一人年2回）</p>	<p>1 プロジェクト研究の指導を行い、21名全員が研究内容の取りまとめを行い、発表を行った。現場で活用できる成果を含む課題を選定し、下記の研修会等で発表を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> 野菜・花き普及員研修会2/3 野菜コース2年荒松卓哉：大玉スイカ立体的栽培による労力軽減 野菜コース2年中村孝史：光を利用したパブリカ増収計画 <p>（果樹普及員研修会2/10） *果樹コース2年上林耕：ブドウ”シャインマスカット”における作業省力化と長期保存技術の検討</p> <p>2 大特免許及び牽引免許取得のための実技指導を実施。 *大特：取得者17名（取得者割合100%） *牽引：取得者19名（取得者割合84%） *日本農業技術検定：2級7名、3級11名 合格者割合（2級または3級）44%</p> <p>3 学生の地域貢献活動を「農村社会と文化」の講座の単位の一部として評価。 *全員が2回以上のボランティア活動を実施。</p>	B	<p>・プロジェクトの設計をより綿密かつ具体的にを行うことが必要。タイムスケジュールを明確に示し、学生の意向を反映しながら、個々の創意工夫を引き出す指導を行う。</p>	<p>（1回目）</p> <p>・免許等の資格取得について、もっと積極的にとらせるようにすべき。法人等の雇用であっても小型コンボなど機械を使うことが多い。危険物取扱口も同様。最低限の必修を設けてもいいのではないか。</p> <p>・コミュニケーションがうまくとれないケースがあり、コミュニケーション能力が非常に大事。素直に人の話が聞けること。</p> <p>（2回目）</p> <p>・プロジェクト研究、素晴らしいなと思った。具体的になんとかしないといけないという課題を見つけて試行錯誤していく、そういったことが学びになる。</p> <p>・観察力の養成が大事、生まれながらに差があるが訓練すれば力は必ず身につく。一生懸命見れば、違いが分かる。そういう動機付けみたいなことを、是非学生にしてあげて欲しい。</p>

課題番号	課題	現状	評価項目	具体的方策及び評価指標	経過・達成実績	達成度	次年度の課題と改善策	外部評価委員会からのコメント
5	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	<p>1 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。制度ごとに研修生のめざす目標・進路、背景やレベルに即した指導及びアドバイス、関係機関との調整が必要である。</p> <p>2 アグリチャレンジ研修は、農業に関する基礎訓練として浸透しつつあり、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に勧める研修として促されているところ。一方、研修生のレベルは様々である上、短期間の研修であることから、法人等への就職に活かせるまでの習熟度への到達が難しい。</p> <p>3 先進農家実践研修にあたっては、就農予定地域での生産部等を主体とした受入体制構築が必須であるが、その調整には多大な時間と労力を要し、想定する每期5名規模での運用には至っていない。</p> <p>4 スキルアップ研修では、野菜専攻研修生に限り、担当品目の施肥設計、使用資材等の選定、栽培管理、収支実績の算出等を一貫して行う「模擬経営」を昨年度より実践している。模擬経営開始までに時間を要する研修生もあり、開始のタイミングを研修生ごとに判断する必要がある等、煩雑な運営となっている。</p>	<p>1 研修生に対する確かな進路指導の実施</p> <p>2 習熟度の向上</p> <p>3 研修コーディネート機能の強化</p> <p>4 運営方法の再検討</p>	<p>1 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。 (評価指標) ・アグリチャレンジ研修生の就農率：70% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率(修了時)：80%</p> <p>2 アグリチャレンジ研修生の習熟度・レベルは様々である。主要機械の基本操作については、一人でも自信を持ってこなせることを到達目標として指導する。 (評価指標) ・主要機械の操作(トラクター耕耘、刈払機、管理機)の習熟度を4段階で評価(◎、○、△、×)し、○以上の研修生が80%</p> <p>3 研修生の研修・就農支援体制づくりをコーディネートする研修調整員の役割を各地域で発揮し、先行実施する北栄町、湯梨浜町の取組をモデルケースとして他地域での新規実施につなげる。 (評価指標) ・先進農家研修 新規実施市町村 5市町村</p> <p>4 研修生の希望品目が重複したり、品目によっては自らが栽培計画作成に携われず、順を追った栽培管理の実施とならない場合も多い。理想的な研修運営としていくため、他県の同様制度も参考にしながら運営方法の再設計を行う。 (評価指標) ・新たな運営方針の確立</p>	<p>1 各研修生の背景と研修進捗を踏まえながら、随時個別面談を実施。関係機関とも打合せを重ねるとともに、普及所との就農情報共有DBを活用した情報の共有を進めた。 ・アグリチャレンジ科研修生の就農率 H27②(4.28終了)：88% H28①(9.16終了)：88% H28②(1.25終了)：65% ・先進農家実践研修生・スキルアップ研修生のうち自身の経営計画作成率(修了時)：100%</p> <p>2 重要カリキュラム(トラクター耕耘、刈払機操作、管理機操作)については、今年度開講研修より、習熟度向上のための回復実施に努めた。 ・主要機械の操作習熟度(○以上) H27②(4.28終了)：67% H28①(9.16終了)：88% H28②(1.25終了)：91%</p> <p>3 地域ぐるみでの研修受入体制を構築する動きは、依然、全県下で仕組みとして機能するには至っていない状況だが、各地域からの相談案件は徐々に増加しており、ケースに応じて研修調整員が関係機関との調整を実施した。 ・先進農家実践研修新規実施市町村 3市町(鳥取市、八頭町、琴浦町)</p> <p>4 研修制度全般の仕組み、あるべき姿を県全体で議論し、農大研修が担う役割を再構築することが必要であり、経営支援課、とっとり農業戦略課、担い手育成機構、農業会議等を含めた検討の場で、一定期間検討を行っていく方針。</p>	B	<p>1 引き続き、各段階での本人面談を基本対応としつつ、早い段階から関係機関と就農支援方針について共通認識が持てるよう、連携に留意する。</p> <p>2 アグリチャレンジ研修生の主要な進路となる雇用就農については、新たな人材雇用による経営発展を志向する経営体の育成と一体的に進める必要があるため、普及所との課題・方針共有をさらに意識して制度運用する必要がある。</p> <p>3.4 研修運営上の課題を常に検証し、改善方針を含めて関係機関と共有することを心がける。</p>	<p>(2回目) ・新規就農者には、農地の良し悪しだけでなく、その地域性もよく踏まえて選定してあげないといけない。農大の課題というわけではないが、関係機関としっかり連携を取って研修生がうまくいくような方策を考えている必要がある。 ・新規就農の場合、2・3年は非常に支援が手厚いが、それを過ぎると手を離される。特に農業は息の長い仕事、意欲があればなんとかなるが、一旦緊張感が切れるとだいたいうまくいかない。 ・アグリチャレンジ科は即戦力として非常に有効。</p>